

書 評

シリーズ〈地誌トピックス〉

矢ヶ崎典隆・山下清海・加賀美雅弘編：『1. グローバリゼーション－縮小する世界－』朝倉書店，2018年3月刊，152p.，3,200円（税別）

矢ヶ崎典隆・菊地俊夫・丸山浩明編：『2. ローカリゼーション－地域へのこだわり－』朝倉書店，2018年3月刊，160p.，3,200円（税別）

矢ヶ崎典隆・森島 済・横山 智編『3. サステイナビリティ－地球と人類の課題－』朝倉書店，2018年3月刊，152p.，3,200円（税別）

グローバリゼーション，ローカリゼーション，サステイナビリティの三つの視覚から世界と地域の課題を読み解こうとする，シリーズ〈地誌トピックス〉3巻が刊行された。これら三つの用語は1990年代までは一般的に使用されるものではなかった。よく使用されている“The Dictionary of Human Geography”の1990年代発行の第3版（Edited by R. J. Johnston, D. Gregory, and D. Smith, Blackwell）には，これら三つの用語は含まれていないが，2000年代に発行された第5版では（編集者が変更になり，D. Gregory, R. Johnston, G. Pratt, M. Watts, and S. Whatmore），これら三つの用語の説明がある。このことは，これら三つの用語または概念が1990年代から使用されてきたことを物語っている。この地誌トピックスシリーズは，これらの比較的新しい概念を用いて世界の多様な側面に光を当てて，地域の課題を読み解き，地域理解を深めるための考察の枠組みとして地誌学の考え方を提示する。したがって，本シリーズで取り上げているトピックと地域は多岐にわたる。

第1巻の『1. グローバリゼーション－縮小する世界－』は以下のような章構成になっている。

1. 越境する人々と文化の伝播
2. 世界の華人とチャイナタウン
3. アジア化する世界
4. グローバル化時代の交通と物流
5. 情報通信技術と情報化社会
6. 越境する資本と企業
7. グローバル化とアグリビジネス
8. 食文化の多様性と標準化
9. グローバル化時代のツーリズム
10. グローバル化と宗教・信仰
11. 人の移動と病気のグローバル化
12. スポーツで結びつく世界の人々と地域

一般的には，グローバリゼーションとは，1990年代からの交通機関の発達，情報・通信手段の進歩により，ヒト，モノ，カネ，情報の流動が国境を越えて活発になり，世界とその経済システムおよび社会が均一になり，より統合されて，相互依存関係が強くなることと理解されよう。ヒトやモノや情報がある場所から他の場所まで到達するのに要する時間が短縮し，第1巻のサブタイトルのように世界が「縮小する」と感じるのはグローバリゼーションの一つの過程である。グローバリゼーションによって世界の人々はこれまで経験したことのないスケールで世界の文化，世界の経済，世界の環境変化にさらされるようになったのである。一方，ある地域では世界文化と世界経済，世界の環境変化がもたらす過程から社会的，政治的，経済的問題が生じる。その一方で，地域経済の孤立，地域文化の維持，環境問題のローカリゼーションが次の課題となる。

上記のような視点から第1巻の内容を見ると4. グローバル化時代の交通と物流，5. 情報通信技

術と情報化社会、はグローバル化時代の日本の事情を説明しているけれども、世界との関わりが述べられていないので、第1巻のグローバリゼーションが説明しようとする意図とは少し違う感じがする。

また、1. 越境する人々と文化の伝播、2. 世界の華人とチャイナタウン、10. グローバル化と宗教・信仰、11. 人の移動と病気のグローバル化、12. スポーツで結びつく世界の人々と地域、はグローバリゼーションを昔からあったことと捉え、ヒトやモノや文化が世界で移動する現象として記述している。確かに、シルクロードのように中国とヨーロッパを結ぶ交易路は存在したし、植民地に投資をして経済活動を行うことは古くから行われてきたが、現在のグローバリゼーションは、これらの時代とは比較にならないほどの規模で生じている。現代のグローバリゼーションを経済の分野で分かりやすく説明しているのは、6章の越境する資本と企業である。この章では、世界の経済活動の進展、多国籍企業の成立と展開、そしてグローバル化が地域の経済発展と人々の生活や企業活動に与える影響を考察している。ここでは、当該地域の地域変容や人々の労働や日常の生活をグローバリゼーションや他の地域との関係性の中で理解することが重要であると説いている。

第2巻、『2. ローカリゼーション－地域へのこだわり－』の章構成は次のように構成されている。

1. ケベック－英語の大海に浮かぶフランス語の「島」－
2. 日本における韓国
3. 外国人の集まる国際観光拠点シンガポール
4. 英国のインナーシティ商店街再生と民族多様性
5. 東京の都市農業
6. オーストラリアの食肉産業

7. グレートプレーンズの資源と人々
8. フランス中央高地における過疎化と農村再編
9. アマゾンの恵みと河畔民の生活
10. ルーマニアのカルパチア山村における持続的発展
11. タイのデルタにおける自然保護とエコツーリズム
12. アフリカ農村における自給生活の崩壊と貧困、テロリズム

ローカリゼーションはしばしばグローバリゼーションと対比される用語であり、地域に根ざした活動の重要性を捉える意味をもっている。これは地域の社会的、政治的、地理的な内容を反映している経済活動の過程が含まれていることを意味する。ここで行われている活動は、ある程度の空間的固定性を必要とし、そこに位置していることからの地理的有利性を得ている。このような理解で、第2巻で取り上げられているテーマを見ると、カナダのフランス語社会、観光拠点としてのシンガポール、イギリスのインナーシティとエスニック集団、東京の都市農業、オーストラリアの食肉産業、アメリカのグレートプレーンズ、フランス農村の過疎化と農村問題、アマゾン河畔の伝統的生活、ルーマニアの山村、タイのエコツーリズム、アフリカの農村のテロリズムはいずれも地域が限定されて、その中で現象が説明されていて、本巻の目的と合致する。ところが、2章の日本における韓国は、過去の日本・韓国の交流・関係や在日朝鮮人の集住地域の形成・消滅・存続、そして在日朝鮮人の経済・文化を説明している。日本全体での在日朝鮮人の活動や文化を説明するのは、ローカリゼーションの視点からでは無理があると思われる。

一方、グローバリゼーションの進展する中で地域の特性を活かしてローカリゼーションを形成した例の説明として第2巻の意図と合致しているのは、6章のオーストラリアの食肉産業である。オーストラリアの食肉産業はグローバル化して国際市場との関わりを強めるにつれて、肉牛の生産形態を牧草で肥育した牛肉から穀物で肥育した牛肉に変えて、オーギービーフとしてブランド化した。このオーギービーフの生産は地域のフィードロットを中心にした素牛生産農場と穀物生産農場を包摂したローカルな現象であり、ローカリゼーションの典型例でもある。このローカルな現象が国際市場と結びついてグローバルな現象となっていることにも注目しなければならない。

第3巻、『3. サステナビリティー地球と人類の課題ー』の章構成は次の通りである。

1. 温暖化と環境変化
2. 人間活動と土地利用変化
3. 水需要の地域的变化と水資源問題
4. 食糧の安定供給と気象災害のリスク
5. 超高齢化社会の福祉・介護システム
6. 多民族・多文化共生の困難に向き合う
7. 先住民族と資源開発
8. 地域間格差と貧困
9. アフリカ・日本から考える人口問題と都市ー農村関係
10. ジェンダーから再考する地域と人間
11. 住の持続性を創造するハウジング
12. 自然と人間の関わりから考える防災・減災

一般にサステナビリティとは、環境（エコロジー）、政治、経済、文化の四つの分野における地域の持続可能性を意味するが、この巻は将来の地球と人類の持続的発展の課題について検討している。

サステナビリティは具体的な地域での地球と

人類の発展を意味する。持続的発展を目指す計画は経済的、社会的そして環境的（生態的）という三つの柱を中心にして追求するとみなされている。世界の各地で持続的な地域開発をするためには、ある地域の経済と社会そして環境に調和して、限られた資源を有効に活用する方策を取り入れる必要がある。このような観点から本書では自然と人間社会が共生している姿を描く地誌を提示している。

本書の第1章温暖化と環境変化、第2章人間活動と土地利用変化、第3章水需要と水資源問題、第4章食糧の安定供給と気象災害、第6章多民族・多文化の共生、第8章地域間格差と貧困では、それぞれの章で扱うテーマについての地球規模あるいは世界全体に関する視点からの記述がある。テーマごとにサステナビリティの基本的考え方が述べられ、それらに対する具体的な地域における実践の仕方が説明されているので、サステナビリティについての理解が進む。日本ではあまり注目されてこなかった第6章多民族・多文化共生の問題、第10章ジェンダーから考察するサステナビリティの記述も有用である。さらに、9章では日本とは環境と社会が異なるアフリカの人口問題を都市ー農村関係から分析し、ここで見られる都市ー農村の流動的な働き方が日本の都市ー農村関係の考察にも有用になると述べている。

一方、第5章の高齢化社会の福祉・介護システムにおいては、地域包括ケアシステムという日本の日常生活圏レベルにおける地域ネットワークを基礎にして、さらに上のレベルの市町村、都道府県、国で福祉対策を実践する考え方が示されているが、このネットワークを普遍的にグローバルなレベルまで高めていくことは困難を伴うだろう。

（菅野峰明）